

第二十八回 交野市・交野市星友クラブ俳句大会

全投句一覧

てまり

一 モンローのスカートのごと手毬つく 岡田 明美

たいあんびおとめ つま きんびようぶ

二 大安日乙女は妻に金屏風 岡田 明美

ははひ ふみよ かえ

三 母の日やひらがなの文読み返す 松崎 幸子

はつあき きぎ そよ

四 初秋や木々の戦ぎのそれらしく 松崎 幸子

わかばかぜ しんちよう

五 若葉風ウオーキングポール新調す 松本 孝治

あか くびふ ぐくしよ

六 赤べこの首振りやまぬ極暑かな 松本 孝治

すわこ すで おさなごはるどなり

七 座り込む素手の幼児春隣 三宅 稀三郎

八

あさすず しめ わだい しょうへいくん
朝涼やメの話題は翔平君

三宅 稀三郎

九

たんさんすい あお えどきりこ
淡酸水はじけて青き江戸切子

廣江 清子

十

ぼん もぎてん うりこわら ごえ
盆おどり模擬店売子笑い声

廣江 清子

十一

にさいじ てあし なつ
二歳児の手足はみだす夏ぶとん

山田 洋美

十二

あともど お さきおおち わ
後戻りできぬ老い先大茅の輪

山田 洋美

十三

こつばめす で おお くち
子燕の巣からはみ出る大き口

中村 幸子

十四

きせいし そぼ ちそう
帰省子に祖母あれこれと馳走する

中村 幸子

十五

えき ごふん かさほ はし つゆ
駅までの五分に傘欲し走り梅雨

早川 周三

十六

しらなみ くず あお なつ うみ
白波の崩れて青き夏の海

早川 周三

十七

はたけう つち にお ただよ
畑打って土の匂いの漂ひし

岡 美津子

ごもくめしも

ちやわん やまよそ

十八

五目飯盛りし茶碗や山粧ふ

岡 美津子

しゅんよう い

うれ う よ

十九

春陽や生きるは嬉し憂き世でも

矢田 千加子

ぼさん お ゆうやけぞら じょうど

二十

墓参終え夕焼空を浄土かと

矢田 千加子

ほほ も あか

二十一

北風や冷たき頬の燃ゆる赤

山際 佐代子

しゅんこう

二十二

春光や富山平野の黒い屋根

山際 佐代子

でんがくや けむり

みせ で

二十三

田楽焼き煙まとひて店を出る

水原 久子

ばいえん

そら あお

二十四

梅園のしたたるピンク空の青

水原 久子

た よ こ

なつゆう

二十五

立ち寄りし子にノンアルコール夏夕べ

近田 弘子

あいづち う

かいご

うめ

二十六

相槌を打つも介護や梅ひらく

近田 弘子

なつこたちあお そら とお

二十七 夏木立仰ぎて空が遠くなり 多田 馨子

おうまどき ひ とも

二十八 逢魔時ほたるぶくろに火を灯す 多田 馨子

とうこう みまも はた かぜかお

二十九 登校を見守る旗や風薫る 松本 恵子

はながら つ おとかる しょうぶえん

三十 花殻を摘む音軽き菖蒲園 松本 恵子

さくらみちごんぎよう こえ かぜ の

三十一 桜道勤行の声風に乗り 加藤 雅美

けいだい あじさい あおそら そ

三十二 境内の紫陽花の青空も染め 加藤 雅美

なつ かんこ か

三十三 夏めくや歓呼とび交ふドッチボール 石川 淑代

えんてん くすり しんさつび

三十四 炎天や薬きれたる診察日 石川 淑代

ぬしな

あかしろ

さるすべり

三十五 主亡くし赤白ピンク百日紅

吉川 和子

アイシーユウまどきぼう くも せみしぐれ

三十六 ICUの窓希望の雲と蟬時雨

吉川 和子

三十七 夏祭り慣れない孫の下駄の音

大杉 禮子

三十八 剪定の鋏の響き玉の汗

大杉 禮子

うんかい み かく ぼさつぞう

三十九 雲海に見えては隠る菩薩像

村上 吉洋

い い おも こくしよ

四十 生かされてゐると思へる酷暑かな

村上 吉洋

四十一 句を詠みし母のおもかげさるすべり

後藤 蓉子

四十二 お盆ぼんきてきりすと教徒きやうとも墓参はかまいり

後藤 蓉子

四十三 産声うぶこえもラインの動画青葉風どうがあおばかせ

勝本 幸子

四十四 吾あの眼めにも写うつすもの有あり花筏はないかだ

勝本 幸子

まなつび

そらは

四十五 真夏日やブルーインパルス空の果て

山田 貞代

くびた

はななにおも

四十六 首垂れしひまわりの花何想ふ

馬木 妙音

ひとよ ひとよ ゆめ つきみそう

四十七 人の世は一夜の夢とや月見草

西村 裕

のうりよううたげ ま とも

四十八 納涼の宴で舞いし友はるか

小野澤 努

ほおずき いちりんそ ふぼ はか

四十九 鬼灯を一輪添えて父母の墓

高石 題子

わ いのちきみ こら

五十 我が命君にあげたしガザの子等

藤代 旗江

五十一 ごしちご よ われしちしちあき い 五七五や詠む我七七秋に入る

岡本 栄子

五十二 朝曇痛む身体に喝いるる

浦野 篤子

五十三 豪雨去り空一面の赤トンボ

浦野 篤子

五十四 暑いねと日々の挨拶もうごめん

上村 征子

五十五 今日もみたセミの抜殻土に埋め

上村 征子

五十六 朝顔の首すじのばし客を待つ

片山 將

五十七 何となく動く気なくす暑氣中り

片山 將

五十八 夕立は好物ですよ庭の草

岸井 富子

五十九 朝顔の数かぞえてる孫の声

岸井 富子

六十 秋暑し幼き頃の友思ひ

木下 典子

六十一 残暑きびしされど我身を奮起して 木下 典子

六十二 古里の柿もみかんもみな元氣 下野 貞子

六十三 体調の悪し酷暑の続きます 下野 貞子

六十四 朝涼し猫の額をかきまはす 杉山 和美

六十五 草の花朝の笑顔を大切に 杉山 和美

六十六 交野山朝焼空に手合す 武村 嘉幸

六十七 稜線の夕立雲に伏せにけり 武村 嘉幸

六十八 我も年取る終戦八十年忌 坂東 英子

六十九 月一度朝刊無き日山開き 坂東 英子

七十 新涼やいつもの明日に感謝して 村尾 紀代子

七十一 コロナより猛暑の夏に疲れはて

村尾 紀代子

七十二 挽きたてのコーヒー香る夏の朝

森田 力子

七十三 あの頃を母は語らず敗戦日

森田 力子